

「中山間地の子育てについて」

～津山市阿波地区と笠岡市真鍋島との交流を通じて～

社会福祉学科 有岡道博

1.調査・研究の内容

(1) これまでの経過

平成 24 年度からの調査活動により、本土では少なくなった子育てのできる地域社会が二つの島に残っており、自然をはじめとして子育て環境も豊かであることを明らかにした。しかし、子ども達に、世代構成の中で抜け落ちている若者（20代から30代）との交流体験が乏しいこと、同級生が少なく子ども集団としての社会体験の少ないことが課題としてあがった。

そのため、平成 28 年度より調査活動の方法を、住民と協働して地域課題を調査しながら解決する「アクションリサーチ」に変更し、学生との集団活動や他地域の子どもの集団活動をおこなった。

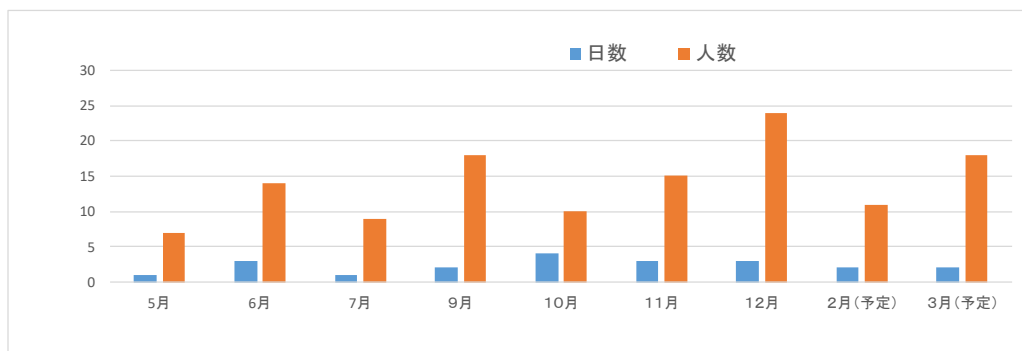
(2) 活動目的

- ① 現地踏査を基本として、積極的に地域住民・子どもと話しあいを行ないながら、地域課題の解決に向けてともに協働して取り組んでいく。
- ② 保護者には、本土の子どもや保護者との交流を通して島の良さを再発見し、島の子育てについて自信を持っていただく。
- ③ 子どもたちにとっては、他の地域の子ども（津山市阿波）と交流することによって、社会経験を深め、島について新たな視点から考える機会とする。

(3) 活動内容（集計結果）

2019年度 活動日数・人数・内容

| | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 2月(予定) | 3月(予定) | 合計 |
|------|------------|--------------------------------------|-----------|-------------|----------------------------|---------------------------|------------------------------|-------------------------|-------------|-----|
| 日数 | 1 | 3 | 1 | 2 | 4 | 3 | 3 | 2 | 2 | 21 |
| 人数 | 7 | 14 | 9 | 18 | 10 | 15 | 24 | 11 | 18 | 126 |
| 活動内容 | 真鍋小・中学校運動会 | 六島小学校運動会 真鍋島島っこ交流活動 水仙ウエルカムツアー | 六島島っこ交流活動 | 島の大運動会(真鍋島) | オクトーバーフェスタ(六島) 回し神輿(六島) | アイランダー(研修会) 初めて体験の旅説明会 | 初めて体験の旅 打ち合わせ 初めて体験の旅in神戸 | 岡山市で活動発表会 水仙ウエルカムツアー | 真鍋島、六島活動報告会 | |



2.個々の活動内容について

(1) 真鍋島小中学校の運動会

場所：笠岡市真鍋島

日時：5月25日（土）

参加者：100名

学生6名 教員1名

内容：真鍋島の小学生3名、中学生3名と住民が行う運動会。競技の準備や誘導はもとより、競技に参加し、島民の方とともに汗を流した。子供の数が少ないため、ダンスに参加し一緒に踊ることもあった。

運動会が終了した午後は、普段できにくいサッカーやドッチボールなど集団競技を行い、学生と交流を深めた。また、保護者や子どもたちと話す時間もあり内容の濃い一日であった。



(2) 六島小学校の運動会

場所：笠岡市六島

日時：6月1日（土）

参加者：50名

学生2名 教員1名

内容：六島の小学生2名、保育園児1名と住民が行う運動会。競技の準備や誘導はもとより、競技に参加し、島民の方とともに汗を流した。島民の方は高齢の方が多いため、すべての競技に参加し、準備や片付けも行った。

運動会が終了した午後は、先生や保護者も含めてソフトフライングデスクを使ってドッチボールを行い、学生と交流を深めた。また、地域の住民の方や保護者、子どもたちと話す時間もあり内容の濃い一日であった。



(3) 島っこ交流活動（真鍋島）

場所：笠岡市白石島

日時：6月16日（日）

参加者：7名

学生8名 教員1名

内容：当初15日から行く予定であったが、暴風のため1日のみとなる。午前中は集団スポーツや屋内ゲームを行うが、午後は天候も落ち着いてきたので魚釣りに出かける。

子どもたちの案内で、釣れるスポットに行き糸をおろすが、風が強く釣果は1匹のみであった。島内の散策をした後、今後の活動について話し合いを持った。



(4) スイセン植えるカムツアー

場所：笠岡市六島 主催：六島まちづくり協議会

日時：6月29日（土）

参加者：約50名

学生1名（急遽日程変更となる）教員1名

内容：島内外の人とともに水仙の畑の整備、球根の植え付けを行う。昼食を一緒に食べたり、島内を散策して交流を深める。島のファンになってもらい、スイセンが開花するシーズンにも再び訪れてもらうことを目的としている。



(5) 島っこ交流活動（六島）

場所：笠岡市六島

日時：7月14日（日）

参加者：6名

学生8名

内容：午前中は集団スポーツや屋内ゲームを行う。お昼は、たこ焼きを一緒に作り昼食とする。午後は子どもの案内で島内散策を行ったり、今後の活動について何を行いたいかに話し合いを行った。

(6) 島の大運動会

場所：笠岡市真鍋島 主催：NPO 海作り海社

日時：9月28日（土）29日（日）

参加者：約800名（笠岡諸島内外の住民）

学生8名 教員1名

内容：笠岡諸島の島民の交流を目的とし、島ごとのチームに分かれて運動会を行う。本土の人も参加して島で一番大規模な行事となっている。前日の準備段階からかわり、掃除、搬入、組み立てなどを行う。当日は子ども競技の運営を中心にを行うが、売店の売り子や係員、競技の出場選手と忙しく過ごす。その中でも声をかけてくださる人もいて、島内外の人とのよい交流を深める場となっていた。



(7) 六島大鳥神社祭礼廻し神輿

場所：笠岡市六島 主催：六島町内会

日時：10月13日（日）14日（月）



参加者：60名

学生1名

内容：大鳥神社のお神輿を担ぎ、島中を1日練り歩く伝統行事。場所場所で、担ぎ手が神輿を中心に円を描いて走り、旋回させる。海につかりながら回したり、船に乗せて海上で船ごと回したりする。勇壮で危険が伴う行事である。島民の高齢化のため、担ぎ手が少なく島外から募集し、毎年学生が手伝いに参加している。島の子どもたちも、太鼓をたたいたり、神楽を舞ったりする。島民全員が参加し、祭りを行うことによって一体感を感じ、地域のまとまりを確認している。

(8) 六島オクトーバーフェスト

場所：笠岡市六島 主催：六島まちづくり協議会

日時：10月26日(土) 10月27日(日)

参加者：400名

学生6名 教員1名

内容：島の麦で作ったビールや島の特産品、焼きそばなどの模擬店が並び、島外から来た人が手作りビールなどを楽しみながら、島の中で一日を過ごす島おこしのための行事。



学生はテントの設営などの準備からかわり、模擬店での販売員なども行う。なれない手でビールサーバーを使ったり、焼き鳥を焼いたりと忙しく働いている。子どもたちもまた、親御さんの店を手伝っていたりと、しっかり家族の一員として働いている。

(9) アイランダー2019 (見学研修)

場所：東京都池袋サンシャインシティ 主催：国土交通省

日時：11月23日(土) 11月24日(日)

参加者：約3千人

学生7名

内容：国土交通省が主催し、全国の離島が出展している「離島の文化祭」。各ブースで各島の特産品を販売したり、パンフレットの提供、試食、移住者の勧誘・相談などを行っている。一か所でたくさんの離島の情報を得ることができ、また離島の文化を味わうことができる貴重な機会である。子どもも含んだ離島の住民による発表もあるだけでなく、離島の島おこしにかかわった各大学の学生による発表



もあり、同じ目線で学ぶことができた。

(10) 初めて体験の旅 in 神戸

場所：兵庫県神戸市周辺

日時：12月21日（土）22日（日）

参加者：子ども12人 保護者2名

学生8名 教員1名

内容：1年間をかけて子どもたちの希望を聞き、保護者の要望も検討したうえで、社会性や自主性の向上を目的として体験旅行を計画した。島から外に出ることが難しい子どもたちにとって、都会はあこがれるだけでなく、不安や恐れを感じさせるものであり、将来体験しなくてはならないものでもある。

そこで、都会での体験旅行を計画して、子どもたちとともに検討することとした。幸いネットを利用すれば、島でもかなりのことを知ることができる。しかし、知ることとできることは異なる。子どもたちが役割分担をこなし、積極的に体験した結果、様々な学びがあったと考える。

主な体験

- ① 電車体験 JR 普通電車 快速電車 新幹線 阪神電車 阪急電車 山陽電鉄
神戸市営地下鉄 ケーブルカー ロープウェイ 切符の購入
- ② 防災学習 阪神淡路大震災記念 人と防災未来センター
- ③ 産業学習 アサヒ飲料明石工場見学（三ツ矢サイダーの製造工程）
- ④ 自然学習 須磨水族館
- ⑤ 宿泊体験 神戸市立自然の家
- ⑥ 調理体験 夕食寄せ鍋作り 朝食サンドイッチ作り
- ⑦ 買い物体験 新神戸駅



3.活動の成果と展望

今年度は、キャンプ場などの都合で阿波村との交流キャンプを開催することができなかった。その分島の様々な行事に参加し、島に少ない若者世代としていろいろな影響を地域に与えることができた。運動会などの行事への参加や島での交流活動の企画実施をするだけでなく、子どもたちの社会体験の場を本土に求め、1年間をかけて子どもや保護者と共に社会体験の旅に取組んだ。その結果から少しでも良いものが生まれてくることを期待している。

現在、人口が確実に減少している地域であり、頼みの綱は移住者と言えるがここ7年希望者がいない状態が続いている。子どもの人口も少なくなり、小中学校の廃校も取りざたされている。その中で島に関係する関係人口（島を訪れる人）としての学生が求められていると感じている。学生をよそ者として捉えてはいるが、島に対して必要なものとして考えるようになってきている。高齢者の多い住民と年齢差のある若い学生との交流が、島では求められている。若い年代との触れ合いが、確実に高齢者に元気をもたらしていると感じる。ただ、子どもたちとは異なる特性もあり、交流の方法や場所が難しく、今後の大きな課題である。

学生にとってこの活動は、まったく見ず知らずの人たちと出会い、人間関係をつけることから始まる。訪問者から、一緒に行事を運営したり、新しいことに挑戦したりする関係者へと変わっていく。その中で、島の方と意見が分かれる難しい場面なども経験し、成長していくことができたと思う。大学では決して学ぶことのできない、社会福祉を仕事とする上で必要な経験でもある。今後も先輩から後輩へこの体験の場を受け続いて行って欲しい。

結論として、島で活動することが、島の住民、島を訪れる人、学生、子どもそれぞれの人間関係の形成につながっている。人口の減少、産業縮小によって過疎化が進む中山間地において、ソーシャルキャピタル（信頼ある人間関係）を豊かにすることは至上命題と言える。社会福祉学を学ぶものとして、その知識が活かせる場でもあり、今後とも学生と共に関わっていきたい。